

[2] 次の文章は「芥川龍之介『トロッコ』」の一部分である。よく読み後の各問いに答えなさい。

蜜柑畑の間を登りつめると、急に線路は下りになった。縞のシャツを着ている男は、良平に「やい、乗れ」と云った。良平は直に飛び乗った。トロッコは三人が乗り移ると同時に、蜜柑畑の匂いを煽りながら、ひたすべりに線路を走り出した。「押すよりも乗る方がずつと好い」——良平は羽織に風を孕ませながら、当り前の事を考えた。「行きに押す所が多ければ、帰りに又乗る所が多い」——そうもまた考えたりした。

竹藪のある所へ来ると、トロッコは静かに走るのを止めた。三人は又前のように、重いトロッコを押し始めた。竹藪は何時か雑木林になった。爪先上りの所には、赤錆の線路も見えない程、落葉のたまっている場所もあった。その路を「a」登り切ったら、今度は高い崖の向うに、広広と薄ら寒い海が開けた。と同時に良平の頭には、余り遠く来過ぎた事が、急に「b」感じられた。

三人は又トロッコへ乗った。車は海を右にししながら、雑木の枝の下を走って行った。しかし良平はさっきのように、面白い気もちにはなれなかった。「もう帰ってくれば好い」——彼はそれも念じて見た。が、行く所まで行きつかなければ、トロッコも彼等も帰れない事は、勿論彼にもわかり切っていた。

その次に車の止まったのは、切崩した山を背負っている、藁屋根の茶店の前だった。二人の土工はその店へはいると、乳呑児をおぶった上さんを相手に、悠悠と茶などを飲み始めた。良平は独りいらしながら、トロッコのまわりをまわって見た。トロッコには頑丈な車台の板に、跳ねかえった泥が乾いていた。

しばらくの後茶店を出て来しなに、巻煙草を耳に挟んだ男は、(その時はもう挟んでいなかったが)トロッコの側にいる良平に新聞紙に包んだ駄菓子を買った。良平は冷淡に「ありがとう」と云った。が、直に冷淡にしては、相手にすまないと思ひ直した。彼はその冷淡さを取り繕うように、包み菓子の一つを口へ入れた。菓子には新聞紙にあつたらしい、石油の匂いがしみついていた。

三人はトロッコを押しながら緩い傾斜を登って行った。良平は車に手をかけていても、心は外の事を考えていた。

その坂を向うへ下り切ると、又同じような茶店があつた。土工たちがその中へはいった後、良平はトロッコに腰をかけながら、帰る事ばかり気にしていた。茶店の前には花のさいた梅に、西日の光が消えかかっている。「もう日が暮れる」——彼はそう考えると、「c」腰かけてもいられなかった。トロッコの車輪を蹴って見たり、一人では動かないのを承知しながらうんうんそれを押して見たり、——そんな事に気もちを紛らせていた。

ところが土工たちは出て来ると、車の上の枕木に手をかけながら、無造作に彼にこう云った。

「われはもう帰んな。おれたちは今日は向う泊りだから」

「あんまり帰りが遅くなるとわれの家でも心配するぞら」

良平は一瞬間呆気にとられた。もうかれこれ暗くなる事、去年の暮、母と岩村まで来たが、今日の途はその三四倍ある事、それを今からたった一人、歩いて帰らなければならぬ事、——そう云う事が一時にわかつたのである。良平は殆ど泣きそうになつた。が、泣いても仕方がないと思つた。泣いている場合ではないとも思つた。彼は若い二人の土工に、取って附けたようなおじぎをすると、「d」線路伝いに走り出した。

良平はしばらく無我夢中に線路の側を走り続けた。その内に懐の菓子包みが、邪魔になる事に気がついたから、それを道端へほり出すついでに、板草履も其処へ脱ぎ捨ててしまった。すると薄い足袋の裏へじかに小石が食いこんだが、足だけは遙かに軽くなった。彼は左に海を感じながら、急な坂路を駆け登

った。時時涙がこみ上げて来ると、自然に顔が歪ゆがんで来る。――それは無理に我慢しても、鼻だけは絶えずくうくう鳴った。

竹藪の側を駆け抜けると、夕焼けのした日金山ひがねやまの空も、もう火照りが消えかかっていた。良平は、愈いよいよ気が気でなかった。往ゆきと返かえりと変るせいか、景色の違うのも不安だった。すると今度は着物までも、汗の濡れ通ったのが気になったから、やはり必死に駆け続けたなり、羽織うゑを路側みちばたへ脱いで捨てた。

蜜柑畑へ来る頃には、あたりは暗くなる一方だった。「命さえ助ければ――」良平はそう思いながら、すべてもつまずいても走って行った。

やっと遠い夕闇ゆふぐの中に、村外れの工事場が見えた時、良平は一思いに泣きたくなくなった。しかしその時もべそはかいたが、「e」泣かずに駆け続けた。

彼の村へはいつて見ると、もう両側の家には、電燈の光がさし合っていた。良平はその電燈の光に、頭から汗の湯気ゆげの立つのが、彼自身にもはつきりわ

かった。井戸端に水を汲くんでいる女おんな衆しゅうや、畑から帰って来る男おとこ衆しゅうは、良平が喘あえぎ喘あえぎ走るのを見ては、「おいどうしたね？」などと声をかけた。が、彼

は無言のまま、雑貨屋だの床屋だの、明るい家の前を走り過ぎた。

彼の家の門口かどぐちへ駆けこんだ時、良平はどうとう大声に、わっと泣き出さずにはいられなかった。その泣き声は彼の周囲まわりへ、一時に父や母を集まらせた。殊

に母は何とか云いながら、良平の体を抱かかえるようにした。が、良平は手足をもがきながら、啜すすり上げ啜すすり上げ泣き続けた。その声が余り激しかったせいか、

近所の女衆も三四人、薄暗い門口へ集って来た。父母は勿論その人たちは、口口に彼の泣く訣わけを尋ねた。しかし彼は何と云われても泣き立てるより外に仕方

がなかった。あの遠い路を駆け通して来た、今までの心細さをふり返ると、いくら大声に泣き続けても、足りない気もちに迫られながら、………

問一 「a」く「e」にあてはまる語句を次の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を塗りつぶしなさい。

- ① どんどん      ② ぼんやり      ③ とうとう      ④ どうどうと      ⑤ やっと      ⑥ はっきりと

問二 本文中での主人公の心情の移り変わりを説明したものととして最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号を塗りつぶしなさい。

- |   |    |   |    |   |    |   |    |   |    |
|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|
| ① | 快感 | ↓ | 衝撃 | ↓ | 焦燥 | ↓ | 不安 | ↓ | 恐怖 |
| ② | 快感 | ↓ | 焦燥 | ↓ | 衝撃 | ↓ | 不安 | ↓ | 安心 |
| ③ | 快感 | ↓ | 恐怖 | ↓ | 衝撃 | ↓ | 不安 | ↓ | 安心 |
| ④ | 安心 | ↓ | 焦燥 | ↓ | 衝撃 | ↓ | 恐怖 | ↓ | 快感 |
| ⑤ | 安心 | ↓ | 恐怖 | ↓ | 不安 | ↓ | 衝撃 | ↓ | 快感 |

問三 — 線部①の理由を説明した次の文の空欄に補うのに適当な箇所を、本文中より八字で抜き出して答えなさい。

良平は「 8字 」と感じていたから。

問四 — 線部②のように「良平」がなった理由を説明したものとして最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号を塗りつぶしなさい。

- ① 土工たちが自分のことなど気にもとめず、茶店にばかり入っているから。
- ② トロッコを何とかひとりで動かそうとがんばってみたが、何ともならなかったから。
- ③ もうトロッコに乗ることもできず、若い土工たちともいっしょにいられなくなってしまったから。
- ④ 今まで経験したこともないくらい遅い時間まで外にいて、すっかり暗くなってしまったから。
- ⑤ 今まで体験したこともないくらい遠い距離を、暗い中一人で帰らなければならぬから。

問五 — 線部③のようにしたときの「良平」の心情を説明したものとして最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号を塗りつぶしなさい。

- ① 汗に濡れた羽織が、臭くてたまらなくなったから。
- ② 板草履いたぞうりを捨てたときの様に軽くなると思ったから。
- ③ 不安な思いをあおるようなものを身につけていたくなかったから。
- ④ 羽織が汗で濡れているせいで余計に遅くなってしまおうと思ったから。
- ⑤ ずっと走り続けてきたせいで身体が火照ほてって仕方なかったから。

問六 本文の表現を説明したものとして最も適当なものを一つ選び、その番号を塗りつぶしなさい。

- ① 細かな景色の描写をすることで、主人公の気持ちを暗示している。
- ② 筆者の客観的な視線を通して、主人公の感情の変化を表現している。
- ③ 比喩を多く用いることによって、主人公の感情の変化を表現している。
- ④ 主人公の主観的な視点から内容を描くことで、その気持ちを表現している。
- ⑤ 会話を中心に話を展開することによって、主人公の感情を細かく描写している。